

58

地域健康指標としての乳児・新生児死亡の精度

—戦前・占領期・復帰後の沖縄の分析例—

逢見 憲一

国立保健医療科学院 生涯健康研究部

【目的】乳児・新生児死亡および生命表などの地域健康指標の精度を検証する。

【方法】全国および沖縄の人口動態統計から、1. 出生届出遅れ率、2. 日齢月齢別乳児・新生児死亡率、3. 月別出生数と国勢調査人口の比、を算出し、長期的・経時的に比較分析した。

【資料】全国および戦前・復帰後の沖縄は、「帝国人口動態統計」、「人口動態統計」。

占領期の沖縄は、「人口動態調査結果表」（1955～1968年、琉球政府、沖縄県公文書館所蔵）、「人口動態調査報告」（1969、70年：琉球政府、1971年：沖縄県統計課、国立国会図書館所蔵）。

1972年以降については、「衛生統計年報（人口動態統計編）」（沖縄県環境保健部）を用いた（1995年以降は保管表）。

【結果】1. 出生届出遅れ率 （1）戦前 1920年代～30年代には、全国は男女とも2～3%台であったが、沖縄は男女とも20数%で全国の7～8倍であった。（2）占領期 1950年代～60年代は、全国が男女とも1%未満であったが、沖縄は男女とも1950年代には10数%、1960年代には6～7%で全国の10数倍であった。（3）復帰後 1970年代は、全国が男女とも約0.2%であったが、沖縄は男女とも全国の約5倍であった。全国・沖縄ともその後届出遅れは減少していたが、2000～11年でも全国の男0.06、女0.05に対して沖縄は男0.07、女0.08と30～40%程度高かった。

2. 日齢月齢別乳児死亡率 （1）占領期 新生児、特に日齢・週齢が低いほど死亡率が低く、出生後1日未満の死亡率（出生千対、年率換算）は、1965～72年で、全国が男928.0、女687.6であったのに対し、沖縄では男158.8、女109.4と1/5～1/6程度にすぎなかった。また、沖縄では1日未満の死亡件数は、1967年まで男女とも0件であった。（2）復帰後 出生後1日未満の死亡率（出生千対、年率換算）は、1973～79年で、全国が男855.5、女655.5であったのに対して、沖縄は急上昇して男912.4、女579.4と沖縄が全国を上回った。しかし、1980～89年になるとふたたび沖縄が全国を下回り、1990～99年には再度沖縄が全国を大きく上回っていた。しかしさらに、2000～11年には、全国が男242.3、女222.3であったのに対し、沖縄は男238.6、女172.2と沖縄が全国を再び下回っていた。

3. 月別出生数と国勢調査人口の比 4半期の出生コホート別にみた出生数（届出遅れを含む）と国勢調査人口の差（国勢調査人口に対する割合、%、15歳未満）は、全国では1980年以降1～2%で安定していたが2000年以降は2～3%前後に上昇していた。一方、沖縄では、同割合は1970年代後半から1980年代前半に出生した世代ではしばしば負値を示していた。1980年代後半出生の世代は1～2%前後の正値を示したが、1990年代出生の世代では再び負値となっていた。しかし、2000年代出生降の世代以降は負値がみられなくなり、全国と似た値を示すようになっていた。

【考察】沖縄の出生届の精度は、戦前・占領期を通じて全国と比して著しく低かった。復帰後は改善されているものの、現在でも全国に比して低い。沖縄の乳児死亡・新生児死亡率は、戦前・占領期を通じて全国に比して著しく低く、特に出生直後の死亡について登録の不備が指摘されているが、本研究の結果から、復帰後には死亡の登録が大きく改善されたことが示唆された。しかし、月別出生数と国勢調査人口の比較から、沖縄においては少なくとも2000年代までは、出生の届出漏れを含む何らかの統計上の問題があったことが示唆される。